

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』に登場する鳥の押し葉

石井竹夫

帝京平成大学薬学部
e-mail : tishii@thu.ac.jp

Pressed Leaves of Birds Appeared in “Night on the Milky Way Train” Written by Kenji Miyazawa

Takeo ISHII

Faculty of Pharmaceutical Sciences, Teikyo Heisei University

Keywords : 文学と植物のかかわり, かはらははこぐさ

「鳥の押し葉」という言葉が宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』の「八、鳥を捕る人」の章で登場してくる。「花の押し花」や「葉の押し葉」は聞いたことがあるし作ったこともあるのでなじみがあるが、「鳥の押し葉」の存在は『銀河鉄道の夜』で初めて知った。賢治はたかさんの造語を作ったが、「鳥の押し葉」はなかなか理解しにくい造語の一つと思われる。日本野鳥の会の会員で賢治研究者でもある国松（1996）によると、鳥を標本にするとき多くは仮剥製にするのだという。脚にデータを書いた札をつけて引き出しなどにいれておいて保存しておく、脚をちぢめて体をのぼし平べったくなるそうだ。国松は賢治がこの仮剥製からヒント得て「鳥の押し葉」を思いついたと推定している。しかし、押し花や押し葉は、採取した植物を新聞紙などの紙の間に挟んで重しを置いて圧縮して作るのが普通である。圧を加えるということに注目すれば、「鳥の押し葉」は鳥を圧縮して葉のように平べったくしたものと考えるのが一般的と思うが、何か薄気味悪い感じがする。賢治がなぜ、「鳥の押し葉」という言葉を考えついたかを本来の植物の押し葉という観点から私なりに推測してみた。

1. 「鳥の押し葉」とカワラハハコ

鳥捕りは、物語では銀河の河原で鷺（さぎ）、鶴（つる）、雁（がん）などの鳥を捕まえて押し葉にして食用として売る商売をしている。「鳥の押し葉」の作り方は、鳥捕りの言葉を借りれば、「天の川の水あかりに、十日もつるして置くかね、さうでなけあ、砂に三四日うづめなけあいけないんだ。さうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるやうになる」である。鳥捕りは白鳥の駐車場で銀河鉄道に乗り込んでくるが、次の

駐車場の鷺の駐車場で降りることからからか、自分のことを「わっし」という。鷺が雁などの鳥を捕食することは知られているので、鳥捕りを鷺（わし）にひっかけて「わっし」と言わせるのは面白い。ジョバンニとカンパネラは鳥捕りから「鳥の押し葉」を見せてもらうが、何か胡散臭い「鳥の押し葉」に疑問をもち、鳥捕りに色々質問してくる。

それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾（きれ）でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

（中略）

「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

「何鳥ですか。」

「鶴（つる）や雁（がん）です。さぎも白鳥もです。」

（中略）

「鶴、どうしてとるんですか。」

「鶴ですか、それとも鷺（さぎ）ですか。」

「鷺です。」ジョバンニは、どっちでもいいと思ひながら答えました。

「そいつはな、雑作（ぞうさ）ない。さぎといふものは、みんな天の川の砂が凝（こご）って、ぼおっとできるもんですからね、そして始終川へ帰りますからね、川原で待ってゐて、鷺（さぎ）がみんな、脚をかういふ風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくつかつかないうちに、ぴたっと押へちまふんです。するともう鷺は、かたまって安心して死んぢまひます。あとはもう、わかり切ってまさあ。押し葉にするだけです。」

「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

「標本ぢやありません。みんなたべるぢやありませんか。」

「をかしいね。」カムパネラが首をかしげました。

2011年11月24日受付。

「をかしいも不審ありませんや。そら。」その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくると解きました。

「さあ、ごらんなさい。いまとって来たばかりです。」

「ほんたうに鷺だねえ。」二人は思わず叫びました。まっ白な、あのさっきの北の十字架のやうに光る鷺のからだは、十ばかり、少しひらべたくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫のやうにならなでいたのです。

(中略；ここで黄色な雁の足をちぎる)

「どうです。すこしたべてごらんなさい。」鳥捕りは、それを二つにちぎってわたしました。ジョバンニは、ちょっと喰べてみて、(なんだ、やっぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もっとおいしいけれども、こんな雁が飛んでゐるものか。この男は、どこかそこの野原の菓子屋だ。

(中略)

二人もそっちを見ましたら、たったいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、美しい燐光(りんくわう)を出す、いちめんのかはらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じっとそらを見てゐたのです。

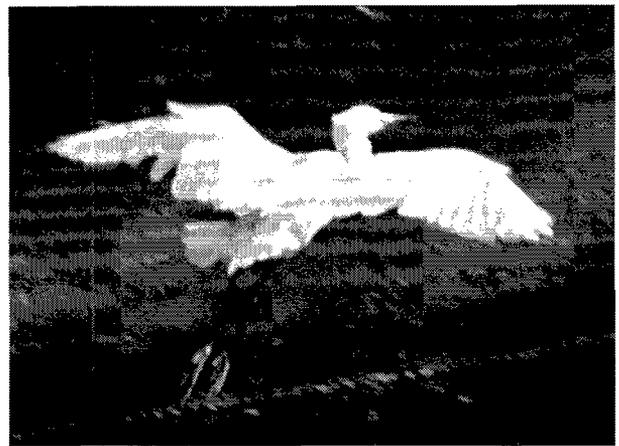
(中略)

がらんとした桔梗(ききょう)いろの空から、さっき見たやうな鷺(さぎ)が、まるで雪のふるやうに、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっばいに舞ひおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだといふやうにほくほくして、両足をかっさり六十度に開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押さへて、布の袋の中に入れるのでした。(下線は著者)

鳥を押し葉(押し花)にするという発想は独創的であるが、そのヒントはどうも「鳥を捕る人」の章で登場するカワラハハコ(河原母子、キク科、ヤマハハコ属)にあると思える。カワラハハコは私の知る限り賢治の作品では『銀河鉄道の夜』にしか登場しない。このカワラハハコに言及した人がいる。賢治研究家の沼田(1996)は、カワラハハコが登場する理由として鳥を捕える商売をしジョバンニに「雁の足」を食べさせてくれたこの鳥捕りと、魚を捕える仕事をしてジョバンニたち母子を養育しているジョバンニの父親とを重ねて読むようにという作者からの合図ではないかと考えた。沼田(1996)はカワラハハコの「母子」に注目しているのだが、『銀河鉄道の夜』を「母と子」の物語として捉えればそれでよいと思う。しかし、「母子」からは鳥の押し葉は説明できないように思える。私は別の視点から、例えばカワラハハコの特徴とか使われ方から言及してみたい。



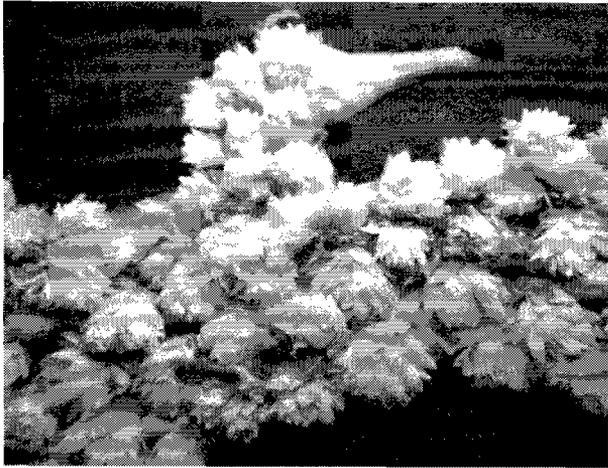
第1図. ヤマハハコ(箱根湿性花園で撮影)。



第2図. コサギ(足は黄色；神奈川県大磯町不動川で撮影)。

カワラハハコは全体に白い綿毛が覆い、花は白いカサカサした花びらのような総苞片に囲まれていて、中に黄色の管状花がある。乾燥させた後でも花が色あせないことから押し花の材料に適した植物とされてきた。エバーラスティング(everlasting)ともいう。エバーラスティングは、園芸の世界では良く知られていて、ムギワラギクのように花が硬くてカサカサして、花が終わった後でも萎れずに、陰干しにしておけばドライフラワーにも利用できるものをいう。大正9年9月、賢治が妹を連れて岩手山に登ったとき、妹が見つけた白い花を賢治はエバーラスティングと教えたという。賢治研究家の伊藤(2001)は、この花をヤマハハコ(第1図；カワラハハコと属が同じで形態も似ているので区別するのが難しい)と推定している。

押し花アートでカワラハハコの細く白い綿毛は雪景色や雲を表現するのに格好の材料になる。物語でも「鷺(さぎ)が、まるで雪のふるやうに、ぎゃあぎゃあ叫びながら、いっばいに舞ひおりて来ました」とある。作ろうと思えば、雪景色ではなくカワラハハコの押し花で「鷺」を創出することもできる。実際にコサギ(羽は白だが足は黄色、第2図)をモデルにカワラハハコで鷺を作ってみた(第3図)。すなわち、賢治は鷺を



第3図. コサギをモデルにカワラハハコで作った押し花の鷺(部分).



第4図. カワラハハコの植物標本(部分).

見て鳥の「押し葉」を発想したのではなく、カワラハハコを採取あるいはそれで実際に植物標本(押し葉)を作ってみたところ、それが鳥の鷺(コサギの体は白く足は黄色)をイメージできたので鷺の「押し葉」を発想したと推察される。第4図はカワラハハコの植物標本である。ハハコグサ(母子草, キク科, ハハコグサ属)は、黄色い頭花が目立ち、白い鷺はイメージできない。

創作上の不完全な幻想第四次空間では何が起っても不思議ではないが、現実的な体験の裏打ちがあると思う。実際に、賢治は、鷺の仮剥製を見たかもしれないが、カワラハハコの植物標本を見たかあるいは作ったのだと思う。また、物語で鳥捕りがジョバンニに食べさせたのは「鷺の押し葉」ではなく「雁の押し葉」であり、それは実際に売られていた米などから作られる「落雁」「初雁」「雁月」などの和菓子からイメージしたものではないのか(京都で鳥の形をした「落雁」が売られている)。賢治が『銀河鉄道の夜』を書き始めた時は、稗貫農学校(現在の花巻農学校)の教諭をしており、汽車の中で子供たちにお菓子を配ったようなことが詩「春と修羅」第二集「序」(1924～1925年)

に記載されている(下線の部分)。

この一卷は
 わたくしが岩手県花巻の
 農学校につとめて居りました四年のうちの
 終わりの二年の手記から集めたものでございます
 この四カ年はわたくしにとって
 じつに愉快的な明るいものでありました
 先輩たち無意識なサラリーマンズユニオンが
 近代文明の勃興以来
 或いは多少ペテンもあったではありませうが
 とにかく巨きな効果を示し
 絶えざる努力と結束で
 獲得しましたその結果
 わたくしは毎日わづか二時間及至四時間のあかる
 い授業と
 二時間ぐらゐの軽い実習をもって
 わたくしにとっては相当の量の俸給を保証されて
 居りまして
近距離の汽車にも自由に乗れ
 ゴム靴や荒い縞のシャツなども可成に自由に選択
 し
すきな子供らにはごちそうもやれる
 さういふ安固な待遇を得て居りました
 (中略)
 そこでたゞいまこのぼろぼろに戻って見れば
 いさゝか湯漬けのオペラ役者の気もしまするが
 詩「春と修羅」第二集「序」(下線は著者)

繰り返すが、鳥捕りを詐欺師と考えれば、「鳥の押し葉」を仮剥製や無理に鳥を圧縮して葉のように平べったくしたものとして考えなくてもよいのではないか。ジョバンニたちにみせたのはカワラハハコで作った鳥の形をした押し花あるいは押し葉であり、ジョバンニたちに食べさせたのは鳥の形をした「落雁」などのお菓子であってもよい。また、「鳥の押し葉」が「鷺の仮剥製」か「鳥を圧縮したものか」あるいは「鳥の形をしたお菓子」かを本文中で明らかにする必要はなく、私のように読者に「鳥の押し葉」とは何だろうと考えさせれば、作者側からすれば「うまくいった」ということになるのだろう。ただ、「鳥の押し葉」という言葉が本文中でカワラハハコ(かはらははこぐさ)と一緒に登場すること、カワラハハコの花びらのような総苞片が鷺の羽根のように白いことそしてドライフラワーや押し花としてよく使われることから、「鳥の押し葉」はカワラハハコからイメージしたものであるというのは言ってもいいのではないか。実際、鳥捕りは「鳥の押し葉」の作り方として、「十日もつるして置く」か「砂に三四日うずめておく」と言っている。前者は明らかにドライフラワーの作り方である。

2. 「鳥を捕る人」の章の隠されたテーマ

「春と修羅」第二集「序」から、さらに興味あることが明らかになる。一つは、『銀河鉄道の夜』に登場する鳥捕りが稗貫農学校の教諭をしていたころの宮沢賢治そのものと重なるということである。一般的には、ジョバンニのモデルは賢治であるとする説が有力であるが、この詩を読めば鳥捕りが賢治自身であると考えたほうが自然である。『銀河鉄道の夜』で鳥捕りの「少しほろほろの外套を着て、せなかのかがん人でした」、「わっしはすぐそこで降ります」、「どうもからだに恰度（ちゃうど）合ふほど稼いでゐるくらゐ、いゝことはありません」という説明や言動は、近距離の列車にも自由に乗り、少ない労働で多額の報酬を得ていたと自己申告している教諭時代の賢治そのものである。自己をあまりにも過小評価しすぎているということもあるが、また、「少ない労働で多額の報酬を得ている」ことをペテン（詐欺）と言っているようにも思える。

もう一つは鳥の名前に関してである。なぜ、鶴と鷺が並列して出てくるのかの答えである。賢治研究家の天沢（1991）が「賢治童話には、科学的根拠のあるものないものも含めて、予告や予知、前兆、伏線などがいたるところに仕掛けられている」と言っている。私も賢治の作品は深読みしても深読みしすぎることはないと思っている。私なりにさらにこの「鳥を捕る人」の章を深読みしてみる。ペテンは詐欺（さぎ）、すなわち鳥の鷺（さぎ）に繋がる。言葉を並列して並べる場合の一つとして反対語がある。詐欺師は嘘をつく人であるから、詐欺の反対語は「ほんとう」あるいは「真実」である。「ほんとう」は英語でtrue（ツルー）、すなわち鶴（つる）に繋がる。乱暴な反対語の連想を試みた。ジョバンニが「鶴、どうしてとるんですか。」と質問したとき、鳥捕りは「鶴ですか、それとも鷺（さぎ）ですか。」と答えるが、この文章は、「真実はどうすればわかるんですか」、「真実のことですか、それとも嘘をいっていることですか」とも読める。鶴は、次の「九、ジョバンニの切符」の章の西部劇映画を連想するシーンの中でも登場するが、インディアンがこの鶴を射止める。インディアンがなぜ鶴（真実）を捕まえられる

かは謎だが、賢治も見たであろうハリウッドの西部劇映画でのインディアンセリフで、「インディアンは嘘をつかない」というのを繰り返し聞いたことを記憶している。すなわち、カワラハハコが登場する「鳥を捕る人」の章では、「真実」と「うそ」の見分け方が隠されたテーマになっている。

『銀河鉄道の夜』の主要なテーマの一つに「みんなの」「ほんたうのさいはひ」を探し求めるというのがある。もっとも難解なテーマである。最終章「ジョバンニの切符」の章でも「ほんたうのさいはひ」という言葉が繰り返し登場してくる。「ほんたうの神様」と「うその神様」についての論争もある。最終章の前に鳥捕りの話を入れたのは、「ほんたうのさいはひ」あるいは「ほんたうの神様」を求めるためにはtrue「ほんとう」と詐欺「うそ」を見分ける必要があるからだと思われる。しかし、賢治にも見分けがつけられなかったのだと思う。カワラハハコの花言葉は「永遠」である。『銀河鉄道の夜』の第三次稿には「おまへがほんたうに勉強して実験でちゃんとほんたうの考えとうその考えとを分けてしまえばその実験の方法さへきまればもう信仰も化学と同じやうになる」という記載がある。我々はこの先、ジョバンニが持っている「どこまでもいける切符」あるいは「ほんたうの考えとうその考えを分離できる実験の方法」を手に入れて、未知の領域を繰り返し通過していくことにより、また仏教でいうなら輪廻転生を繰り返していくことにより「ほんたうのさいはひ」を見つけていくことになると思う。

参考文献

- 天沢退二郎. 1991. 謎解き・風の又三郎. 丸善. 東京.
伊藤光弥. 2001. イーハトーヴの植物学. 洋々社. 東京.
国松俊英(著)・藪内正幸(画). 1996. 宮沢賢治 鳥の世界. 小学館. 東京.
宮沢賢治. 1986. 文庫版宮沢賢治全集10巻. 筑摩書房. 東京.
沼田純子. 1996. 「銀河鉄道の夜」ところどこ, 私読. 宮沢賢治 14:120-132.